

## 令和3年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

### 「過去から学ぶ」

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 2年 <sup>まつだ</sup>松田 くらら

私の祖母の家には、私と私の家族の写真が載った何年か前のカレンダーが貼ってある。そのカレンダーは、半分がふやけて茶色く汚れている。祖母になぜ汚れているのかと聞くと、

「まだくららが小さい時に家の裏の山が大雨で崩れた時に家が壊れて、その時に雨水、泥土が家の中まで入ってきて、その時にこのカレンダーのところまで泥が上がってきたんだよ。」

と教えてくれた。この茶色く汚れたカレンダーにはこんな物語が、刻まれているんだ、とすこし驚いた。いつだったか忘れたが、祖母がこの土砂崩れの事でテレビに出ていたことを思い出した。その時、私の母は私に

「おばあちゃんはね、この土砂崩れのせいで違う家にしばらく住んでね、その後も家に入った泥を出したり家を直したり大変だったのよ。」

と教えてくれた。でも、正直私はまだ幼くてその時の記憶は全くと言っていいほど覚えていなかったため、そんなに土砂崩れのことについて深く考えたりはしなかった。しかし私が小学生の時に地図帳の1番最後のページを開くと全国で今まであった被害の大きかった自然災害のページを見つけた。その時私は、思わず息をのんだ。祖母の土砂災害にあった直後の家の上空から撮った画像が載っていたのだ。私は、この土砂災害のことについて詳しく知りたかったため、祖母に聞いてみた。ギシギシシー。2010年10月20日午後7時過ぎ、寝室にいた祖母は激しい雨音の向こうに何かがかしむような音を聞いた。「変だな。」山がある西側の窓を開けた瞬間、道向かいの民家の小屋が赤土の土砂に押しつぶされた。ぼうぜんとする祖母の耳に次の瞬間、ごう音が響いた。同時に家全体を衝撃が襲う。とっさに隣の居間に逃げ込んだ。大木や電柱が祖母のいた寝室の窓と壁をぶち破り押し寄せ、祖父母は外に出た。2階建ての家半分を赤い土砂と無数の大木が覆っていた。寝室は全体がひしゃげた。直撃を免れた部屋も濁流で水浸しだった。一夜明けた21日。祖父や私の父は家の片付けに追われたそうだ。家は、土砂崩れにあう4年前の3月に、祖父の退職金で建てた念願の新居だったそうだ。私はこの話を聞いてとてもショックだった。身内でこんな大変なことが起こっていたのに、何も知らずにのんきに過ごしていた私が憎らしくなった。祖父母は、この土砂崩れのあった家に今も住んでいるが、次また土砂崩れが起こるのか、誰にも分からない。私達ができるのは起こる可能性は決してゼロではないということ。今年の夏に入ったばかりの頃、静岡県熱海市の伊豆山で土砂崩れが起きた。急な出来事だったので、私はとても驚いた。死者は現在26名だそうだ。事故直後は死者数よりも行方不明者の方がとても多かったが、日に日に行方不明者数は減っていき、死者数が増えていた。私は、もし奄美であった土砂崩れで祖父母が気づかずに逃げ遅れていたら今どうなっているのだろうか、と考えてしまった。

土砂災害というのは、起こる予兆なんてないし、どれだけの規模なのか、どこで起こるのか、そんなのは誰にも分からない。しかも、ここ日本は土砂災害の多さは世界から見ても多いそうだ。なぜ、ここ日本が土砂災害が多いのか調べた。結果は、日本は国土の7割が山地であるため、河川は急勾配で流れも速く、氾濫などが起きやすい地形だということ。また、活発な地殻変動によって複雑・不安定な地形・地質が形成され、温帯多雨という気象条件から、土砂災害が起りやすくなっているそうだ。私達は、土砂災害を止めることは不可能だ。しかし、逃げることならだれだってできる。命を守るためなら、全力で。そのためには、安心・安全に逃げることを最優先するのが鉄則だ。さらに、普段からハザードマップで避難場所を確認するといい。そして、防災リュックなども準備しておくといいそうだ。自分自身は被害にあっていなくても、いつ、なにが、どこで土砂災害が起こるか分からない。だからこそ、万全な対策で、今ある素敵な日常を大切に過ごしていきたい。